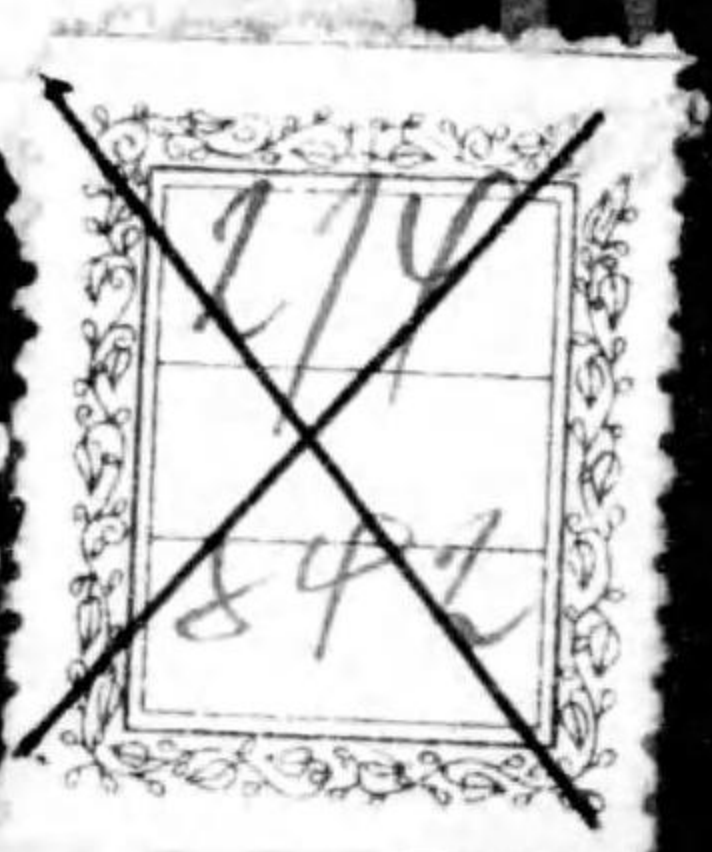
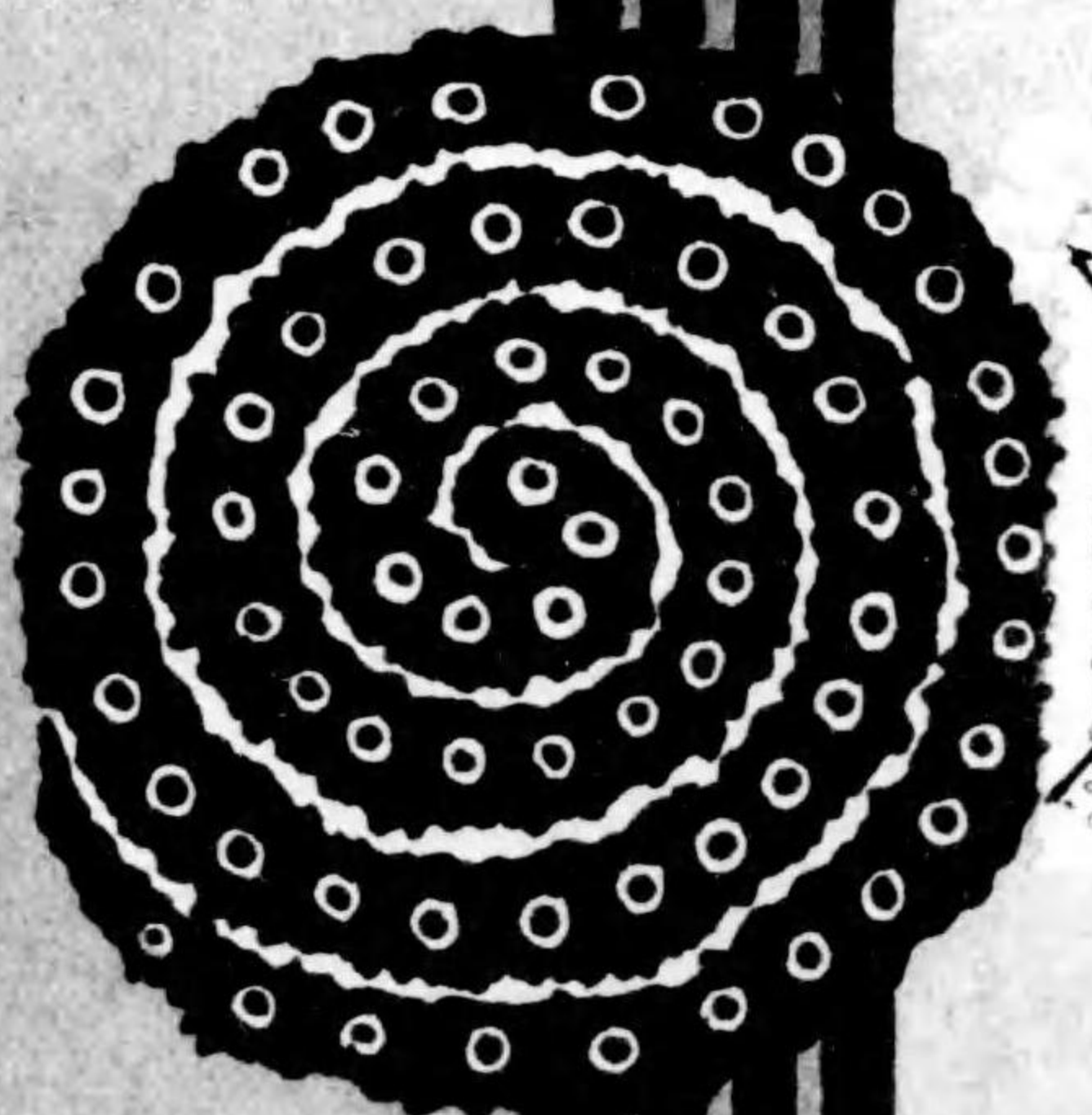
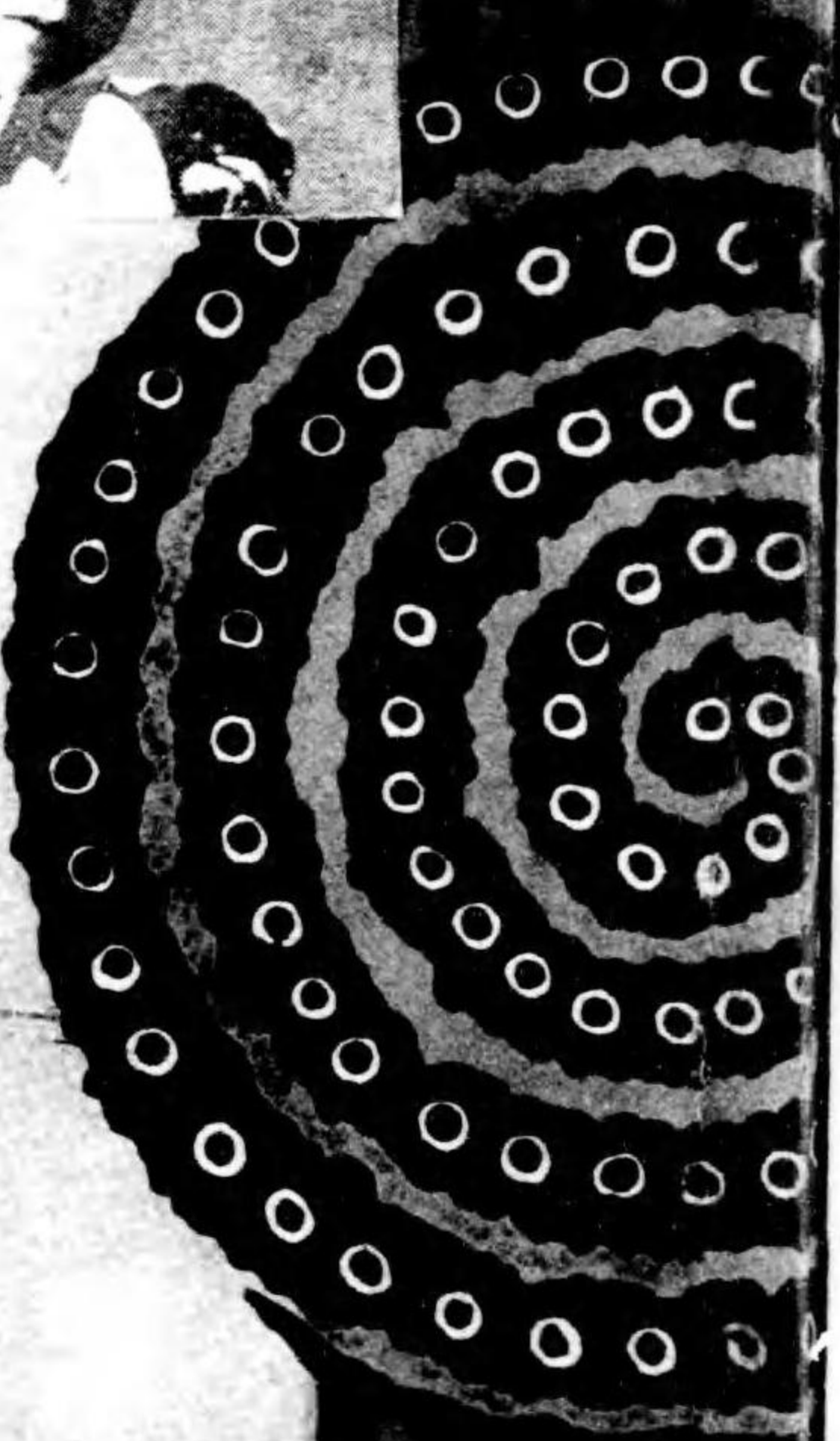


花子集



特  
3



花





持100  
356

(1) 次 目

こはいろ集目次

佐倉義民傳	白浪五人男	幡隨院長兵衛	極印附幡隨院長兵衛	石田詰真砂詠戀	辨天娘男女白浪	當流鉢の木
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....

寄	桐	牧	歌	春	櫻	天
生	一	師	舞	之	時	神
木	葉	家	物	歌	雨	記
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....

大正  
3. 5. 20  
内交



新こわいろ集

○當流鉢木

佐野源左衛門常世  
二階堂 雜色

伊井 蓉 峯  
藤井 六 輔

北條殿大門内

源左、そちも大塙へ行きたいか。心はたれも劣らねども、銷長刀に破れ、鎧身の廻りのさま悪うさに、知らぬ人にまで蔑視まれ、言葉

オ	セ	ロ	...
日	蓮	辻	説法
ハ	ム	レ	ツ
天	目	山	...
ロ	メ	オ	エ
敵	國	降	伏
不	如	歸	...
豫	備	兵	...
金	色	夜	...



にかくるとのものもない、これと貧のなせる業、辛しとてたれを恨ま  
う、世の中の廣さは、我等に劣る人もある。なう、それ去歳の雪  
の日よ、飢に疲れし旅僧の、我等が方へ宿せられ、粟粥を啜られ  
て、それよ、鉢の木を切り火に當てたれば、ねんごろに一禮いわ  
れたがあつた。あの様に詫しき法師に較べたれば、馬をもち、具  
足をつけ、長刀を持ちたる源左衛門、まだく富貴の身にこそあ  
れ。貧を恨むな！ 叔父に悪名立たすがいやさに、好んでなつた  
る今の身ぞ、富貴を望まず、權威に阿らざる常世なれば、飼葉も  
存分には與へぬそちを、不便ながらも追立つて、まこと一番には

せ參じたれば、すわ鎌倉との誓ははたらた。その上の功名がなに  
あらう、世の人口は心の外な！ 戦場にては、思ふ敵と寄合ひ打  
合ひ、打死にすれば、一定事はすむまでよ。そおも其折は郎黨が  
わりに我等と死にね、むは、ハ、ハ、。

雑色はれやれ、方圖もないこと仰せつけられた。此おびたしい人  
數の中で武者一人拾ひ出すとは。あれぢや。——なう、御前にて  
お召ぢや、さあ、御前へ出られませい。

源左「なに、某を御前へ、それは定めて人違ひ……………」。

雑色「いやいや、名こそ承らね、御身に相違ないと申すは、拗れたる



具足を着、鎧らたる長刀を持ち、瘡せたる馬を自身にひかへたる武者、あは、この人数の中ちやが、この仰のはたと合ふたは御身一人、何の人違ひ、さあ、さあ、身共と一緒に、御前へ出られませ。

源左むう、さては叔父御の悪心未だやまず、謀叛人と申し掠め、罪科に落さん結構な！。よし、それも天の運、いかにも御前へ罷り出でよう。

雑色「さあ、お來やれ。」

源左「馬は？」

雑色「そのまかせませ

源左「む、

雑色「さあ急がせられい。

源左「承はつた。」

○辨天娘男女白浪

濱松屋の場

辨天小僧

尾上菊五郎

南郷力丸

市川左團次

勇知「ア言て聞せやしやう、濱の真砂と五右衛門が、歌の残せし盗人の、種は盡ねへ七里が濱、其白浪の夜働らき、以前を言やア



江の島で 年期勤めの兒が淵、江戸の百味の蔭錢を、當に小皿の一文子、百か二百の賽錢のくすね錢せへ段々に、悪事はのぼる上の宮、岩本院の講中の、枕さがしも度重なり、お手長講と札附にとふく島を追出され、夫から若衆の筒持せ、爰やかしこの寺島で、小耳に聞た祖父さんの、似ぬ聲色でゆすりかたり、名せへゆかりの、辯天小僧菊之助といふ、小若衆さ。

カ其合すりの尻押は、富士見の間から向ふに見る、大磯小磯小田原かけ、生れが漁師に浪の上、沖に懸つた元船へ、其船玉の賽錢を、ばんと打込捨碇、船丁半の側中を、引渡つて來るかすり取、

板子一枚其下は、地獄と名に呼ぶくら闇も、明るく成て度胸が据り、艦の押借やぶつたくり、船足重き刑狀に、昨日は東今日は西居所定めぬ南郷力丸、面を見知て貰ひやしやふ、

○石田詰眞砂詠戀

樓門の場

石川五右衛門

市川團十郎

五いかさま春の詠は、あたへ千金とはちいさいたとへ此五右衛門が目からはあたへ萬兩、心の鬼もやわらぐる自詠の歌も時の興、ハテたわむれで在たよなア、日も西に傾けば是から又己が世界野



山も霞み春の夕暮くれの櫻もひとしほくハテうららかな眺めじやよなア。

○極附幡隨長兵衛

鈴が森の場

長兵衛

市川團十郎

長サア頼まれて、ひかの所がわしが氣性はと云ふのも有がたい事にやア何れも様の御最負ではんの親父のまねとまにあいしやうか鉛か銀なかし見かけはけちな野郎だが水道の水で育つたをかげにやア氣が強ひといかぬ迄も膽玉は觀音の塔とせいくらへ堀の蛙は

ぶらくと朝晩いきた不二筑波是が馳走の花川戸瓦けむりのけむてへやつと世間で達兼のはしくれ阿波座島は浪花がた敷黄鳥は京そだち江戸の男と立られて男の中の男一疋いつでも尋て御座りませかけ膳すへて待て居りやす。

○幡隨院長兵衛

水野屋敷の場

幡隨院長兵衛

市川團十郎

水野十郎左衛門

市川權十郎

十是まで數度の喧嘩より、神祇組と町奴は、互ひに敵同様に、遺恨に思ひをつたるも、水に流して今日より、長へ惡意を結ばんと



酒宴を催し、根岸が酒興に乗じて柔術の、試合を只今望みしが、如何にも家來が未熟なりとて、眞の當身で殺すと云は、不屈至極の其方が舉動、最早勘辨相成らねば、一旦結びし友達の、好みを立切り其方が命、當家へ土家に致して參れ。

長如何にもあなたへ差上ましやう、兄弟分や子分の者が、留るを聽かず只獨り、迎ひに應じて山の手へ、流れる水もさか登る、水野の屋敷へ出て來たは、元より命は捨る覺悟、萬年生るも水子で死ぬるも、持て生れた此身の定業、卑怯に人を頼まずに、こなたが初手から呉ろといやア、名に負ふ天下の御旗下、五千石の知行

取、相手にとつて不足のねへ、奇麗に命を進せるから、度胸の据つた此胸を、すつぱりと衝なせへ。

士さすが以前が武家出丈け、下素下郎の町奴には、根性のすはつた幡隨院、殺して仕舞へばかのづから、其根を斷て葉を枯す、大身鎗の田樂ざし、時候も丁度木の芽時、茂る樹木に行道も、闇さ旅路の十萬億士、道を急ひで早く行け。

長ヲ、先へ行も一ト筋道、六郷ならぬ六道の、札の辻から眞直に三途の川の川端で、死出の山駕拵らへさせ、こなたの來るのを待て居るから、早くおれを殺さつせへ。



士「唯今一命断て遣わす。」

長「サア、どこからでも突なせへな。」

士「ドレ息の根を止てくれん。」

○白浪五人男

由井が濱の場

日本 駄右衛門

市川 團十郎

辨天小僧菊之助

尾上 菊五郎

忠 信 利 平

市川 權十郎

赤 星 重 三

中 村 彌 助

南 郷 力 丸

市川 左 團 次

駄「問れて名乗も烏餅がましいが、生れは遠州濱松在、十四の年か

ら親に放れ、身の營業も白浪の、沖を越したる夜働さ、盗みはするが非道はせず、人に情を掛川から、金谷をかけて宿々で、義賊と噂高札に、廻る配符のたらいごし、浮雲其身の境界も、最早四十に人間の定は僅五十年、六十餘州に隠のねへ、賊徒の首領日本 駄右衛門。

勇「扱其次は江の島の、岩本院の兒上り、平素着慣し振そでから鬮も島田に由井が濱、打ちむ浪にしつぱりと、女に化て筒持せ、油断のならぬ小娘も、小袋坂に身の破れ、悪い浮名も龍の口、土の牢へも二度三度、段々越る華表敷、八幡様の氏子にて、鎌倉無宿



と片書も、島に育た其の名さへ、辨天小僧菊之助。

利續て跡に控しは、月の武藏の江戸育ち、小兒の時から手癖が悪く、抜參から蕩出て、旅を稼ぎに西國を、廻つて首尾も吉野山、まぶな仕事も大峰に、足を止たる奈良の京、碁打といつて寺々や豪家に入込盗んだる、金が御嶽の罪科は、毛抜の塔の二重三重、かさなる悪事に高飛なし、跡を隠せし、判官の、名前懸りの忠信利平。

其亦次に連なるは、以前は武家の中小姓、古主の爲に切取も、鈍き刃の腰越や、砥上か原に身の錆を、研直しても抜難る、盗み

心の深縁柳の都谷七郷、花水橋の切取から、今半若と名も高く忍び姿も人の目に、月影が谷御輿か嶽、今日ぞ命の明方に、消る間近き星月夜、其名も赤星重三郎。

力扱鈍尻に控へしは、沙風荒き小動の、磯慣松の曲形、人に成たる濱育、仁義の道も白川の、夜舟に乗込舟盗人、浪に晃く稻妻の白刃に脅す人殺し、背負て立れぬ罪科は、其身に重き虎が石、悪事千里と云からは、何で仕舞は木の空と、覺悟は豫て鳴立澤、併し哀は身に不知、念佛さらいな南郷力丸。

五ッ連立雁立の、五人男に象取て。



菊「案に相違の顔觸は、誰白浪の五人連。  
利「其名も轟く雷公の、音にひびきし我々は。  
重「千人餘りの其中で、極印打た首領分。  
力「太へか布袋か盗人の、腹は大きい膽ツ魂。  
駄「ならば手柄に。  
五人「搦めて見ろ。

○佐倉義民傳

渡しの場

木内宗吾  
渡し守甚兵衛

市川團藏  
澤村訥子

宗「願ひのために江戸へ出で、思ひの外に日數を經、忍んで歸る古郷も、去年の冬に引換て、田畑も其儘荒果て、村里共にシンくと人氣も自づと絶たるは、多くの人も誰散じ、他國へ立退し物なるか、以前に變りし國の有様、テモ情ない時代じやなア、頼みま

すく。  
吾「やうく焚火で煖まつた、所を頼むと云ふのは往來の人か、此頃は殿しいお觸で、日が暮ては船は出されぬ、翌日にさんせく。  
宗「爾うでもあらうが之甚平我じやく。  
吾「エ、人の名を呼ならずは誰じやく。



宗「おれた。

甚「やお前様は。

宗「甚平か。

甚「宗五郎様

宗「ジャツ何故に焚火を。

甚「ア、モシ〜火は消えても焼炭は澤山、マア煖まひしやれ。

宗「甚平どの變つた事もないか。

甚「若し宗吾様どふして茲へお出でなされました。

甚「こなたは兼て知る如く、親父様が江戸へ出て、佝人共の爲めに

附添ひ行きし人迄も入牢、何ぞ助けやうと家數へ慈悲を願ひ、隼人様や左司馬様がいろ〜にとの心盡しも、少しも届かず日數を過す内には、國に残す女房忰も、又組合の家内の様子も見たく、夫れ故歸つて來ましたのさ。

甚「夫では國の深い様子お前さんは御存じは御座りませぬか。

宗「知らぬかとは何を。

甚「サア此方様が江戸へ登た其跡は、いつぞや國で一致した人々の其中で、少しは物の用に立と、目指された衆は拾ひ上げて、夫々に繩かけられ、獄屋の苦しみ、其恐ろしさに妻子を連れて、所を未



るものあり、持た田地田畑も其儘になるが、惜いと未練に國に居る者は、時をさらはぬ未進催促、イヤモ恐ろしい邪見な掟、又あなただ様の國へ戻つてお出なさるを、手ぐすね引て待つて居ります夫れ故晝夜を分たず見廻りの役人があり、滅多に油断さつしやりますな。

宗亂れくし國の大變、時日を過す其日には、百姓は自づと路頭に迷ひ、飢渴に憂目を見る斗り、親父様の眼鏡にて、木内家を受繼で此村の束ねを仕ながら、千辛萬苦の願ひも叶はず、親父様には永の牢舎、多くの人の幾瀬の苦しみ、之と言ふのも織田の御家

へ仇なす悪人が、理非辨への無法のはからひ。

此爺などは先づ一昨年の病らうた其時に、藤左衛門様やお前様が、ソレ薬よ醫者よと色々、御恩を受けて活のばわり、夫から結句丈夫になり、此有難さの裏が来て、兎角長生は恥多しと、こんな浮世にながらへ居りますが、死んだ婆奴は仕合せ者、此秋の取入れも、世間亂れてなかくに、百姓業の夜仕事も手傳ひさへも出来ませねば、日夜糧さへ乏しき上、他國から此國へ往來する人は、晝さへたまさか夜に入ると、お國の者が他國へ立退く事もあらうかと、七ツを遇れば渡し舟は、役人が茲へ来て鎖で繋ぎ、



錠前おろして往來を留る故、猶更商賣はあがつたり、申し宗五郎様、何ぞ仕様はござりませぬ。

宗「迎も一通りの手段では二百八十四ヶ村の安穩思ひもよらず、數萬人の難儀故、大勢の人になり代り、此宗吾が身に代へて、頓て村方里々まで、昔しに變らぬ様にして、盆正月をさせやうから、必ず案じさつしやるな。」

甚「なんと言はつしやる、お前様のお身に代つて夫りやア大抵な。」

宗「サ若しも願ひの叶はぬ時は、命を一つ差出す了簡。」

甚「チエ、有難い思召し、マア命を捨て、の願ひとは、餘まりな

思ひ切りやう、ア、成程左様したお願ひなら叶ふは知れた事、然しまあ命迄お捨てなされて、數萬人を助けやうとは有難いお志しホンに神にも佛にも、數多の人の願ひ事、空しくせまいお心底、世に頼もしいお心じや。

宗「ハテ段々と聞く村の大變、片時も早く江戸へ登り彼の願ひを。

甚「之は仕たりお前様も只今私しのかどを叩いて、舟を頼むと仰しやつたじや御座りませぬか。」

宗「どうで再び在所へは戻る瀬はあるまいと、思ひ込んでの願ひ事同道なした人達が言はるゝには、左程の事なら猶以つて、一度在



所へ忍び行き、妻にも一寸逢つて来いと、段々との勸め黙止がた  
く、未練らしく立戻るも女房へ、餘所ながら暇乞ひ、子供等が事  
妹の事、跡々の事迄と茲迄は来たれども、船の通路が止まれば、  
我家へ便らん様もなく、時刻を移す其内に、人目に立つては詮な  
い事、夫れ故矢つ張り此まゝに。

甚サ、之れ待たつしやりませ、假令跡で何やうな、難儀に逢つて  
罪受やうと、些とも厭はぬ厭ひはせぬ。

宗「ハテ夫ではこつちの心が濟まぬ、夜更ぬ内に。

甚「待たまつた。

宗「コレ。

甚「何するものじや乗らしやりませ。

宗「ヲ、甚平殿何にも言はぬ辱い。

○天神記

車曳の場

梅王丸 松王丸 時平公 櫻丸 杉王丸

市川團十郎 尾上菊五郎 市川左團次 中村芝翫 市川染五郎

梅「何と聞たか櫻丸、齊世親王管相亟を、憂目に逢せし時平の大臣



存分云はふじや有舞か。

櫻「成程々々、能い所で出會した。

梅櫻「車やらぬ。

杉「やア何者なれば狼藉なす、見れば松王が兄弟梅王に、櫻丸、ム、聞へた主に放れ扶持に放れ氣が違ふての狼藉か、但しは又、此車、時平公と知て留たか知らずに止たか、返答次第用捨は爲ぬぞ。

梅「やア云ふなく、氣も違はねば此車見違へもせぬ、時平の大臣。櫻「齊世親王管相壘、讒言に依て御鎮落、其無念骨髓に徹し、出會

所が百年目、思ひ設し今日只今櫻丸。

梅「此梅王、牛に手馴し牛追ひ竹、位自慢で位をとつた、時平殿の

尻こぶた、一ツ二ツ三ツ四ツ五六百くらはさぬ内は勘忍ならねへ。

杉「やア法に過た案外者夫れ打延せエ。

松「命知ずの暴れ者いづたもお構ひあるな此松王が御主人への奉公始め兄弟一つで無いといふ忠義の働さお目に掛ん、コリヤ、ヤイ、松王が引かけた此車、止められる者なら止て見ろエ。

櫻「櫻丸と。

梅「此梅王茲になくはいさ知らず。



櫻「一寸なりと。」

梅櫻「やつて見ろエ。」

松「何を小癩な。」

時「ヤア牛扶持くらふ青蠅めら、轆に止つて邪魔ひろかば、轆に掛て曳殺さん。」

梅「ヤア左いふ大臣を。」

櫻「曳殺さん。」

時「ヤア時平に向つて推參なり。」

松「何と我君の御威勢見たか、此上に手向ひすると、お目通りで一

討だぞエ。」

時「ヤレまで松王金冠白衣を着すれば天子も同前、大政大臣と成て天下の政事を執行ふ時平が眼前血をあやめては社臺の汚れ、助け悪い奴なれ共下郎に似合ぬ松王が働き、忠義に免じて助ふて呉ふ命冥加な蛆虫めら。」

松「よい兄弟を持って兩人共仕合せ者、命を拾ふて有難い、辱ないと三拜せよ。」

櫻「エ、おのれにも言分有共親人の七十の賀祝義濟まで、ノヲ梅王。梅「オ、其上では松の枝々へし折て、敵の根を絶ち葉を枯さん。」



松「ヲ、そりや此松王も親人の賀を祝ふた跡で梅も櫻も落花散塵、  
足元の明るい内早く行け〜。  
梅櫻「ヤア歸るを己に習おふや。」

○櫻時雨

櫻谷詫住居之場

灰屋紹由

片岡仁左衛門

女房おとく

中村芝翫

紹由「何、あけやすき恨みもあらじ我袖にすいしさ残せ夏の夜の月、  
イヤこれこそ眞の風難じや。世を遁れた樂隠居、遊んで暮せば盡  
つぶし、世を捨てた道心も、功德が無ければ死人も同然。職もあ

樂もあり。詫もあり。花もあり。これが誠に此世の味、いや茶の  
湯の味でござります。御主人はどなたやら、私にも忤が一人ござ  
りましたが、酒は呑んでも茶は吞まず、遊びは知つても道は知ら  
ず。たわけを盡した其果は、とう〜勘當しましたが〜。  
おとく「エ、そしてどうおなりなされましたえ。  
紹由「どうなつたやらそれなりに、行衛も今は分りませぬ。  
とく「なせ免しなされませぬ。  
紹由「それは免す事は出来ませぬ。此世の味を悟らねば、内へ入れて  
も人にはなりませぬわいな。」



さく「して其譯とおつしやりますは。

細由「さあ其譯は——こりや一寸申されませぬ。

とく「それではいつまでも其儘に。

細由「さあして置かねばなりませぬ。

とく「あのまゝ一生、

細由「氣強いと風召すか知りませぬが、それもまた此世の遊、魂かた磨かねば、身も立たず家も立たず、まんざら教へなんだのでもござりませぬが、不足がない丈、氣儘となり、魂抜けて色狂ひ、今では何となつたやら、まだ迷ふて居るか、悟つたか、氣がちがら

たか死んだかと、秋の夜長の寢醒がら、やうく寒うなるにつけ京の町をうろくと、耻かしい姿をしをらぬか、海山隔てた遠國で苦しいわざでもして居るか、問ふに問はれぬ其せつなさ、思のせいか身も弱り先も見へる老のいのち、もしやこれきり逢はれぬかと、人知れぬ涙もこぼしますわい、あゝこれは私とした事がうかくと愚痴な話、おはづかしう存じます。

○春の歌

隱岐島燈臺之場

燈臺守重藏

高田實



重藏「あゝ来たゝ何しに来た、何の爲めに来た、ナニ娘を取りに来た、何だ東京の者だ、華族だ、若様だ、私の女房だ、何故それまでに私の一家を酷めるか、野上重藏を苦しめるか、娘お筆に何の咎があるか、歸れ、利慾の煽に事を廻す鬼の如き都人ならば、奈落の煙となつて歸れ、人を斯く追従の紙より薄い腹ならば、朝日に消ゆる薄霧となつて歸れ、妻を奪ひ子を奪ひ娘を奪ふ惡漢ならば夕立含む黒雲となつて歸れ、ナンダ、私の女房だ、秋の水より冷たい眼の底の輕薄な光、操と共に失せ果た唇の色、其儘に此重藏に逢ふると云ふのか、何んた、娘のお才だ、私の娘ならお筆

の姉だ、お前の母が私を辱しめた如く、お前はお前の妹を辱しめたんだ、ドノ面下げてお父さんと云ふ、見れば立派な着物だねえ、其の着物を剥いで見せろ、一枚を剥き二枚を剥き三枚を剥き身體中の皮を引き剥いたら嫉妬と詐欺の腐つた肉が犬の腸と共にはみ出すであらうハ、若様だ、それが華族だと云ふのか、行け行け、イヤ待てゝ返せ、娘を返せ。

○歌舞伎物語

伏見城中見所之場

越前中納言秀康

市川左團治

本多伊豆守富正

實川延二郎



秀康「世渡りは旅路のさまざま東南西北志すに任かせたり、我れは此方と思へども、人は彼方へ足を向けたり、走りし後は草の蔭野、冥途の道は賑ふのう。

伊豆「何とてかやうに心細き事のみ仰せあるやらん、是れもおん病のなす所か、御心確かに持たせたまへ。

秀康「伊豆、あれ見れば方は舞の囃子、人の世に咲く物云ふ花を、現に見ては此世を去る、蘆の若葉、あな心な海士人は、月諸共に刈り取るならめ、秀康一日世にあれば、世は一日の義を繋ぐ、われ失するときは義は滅せん、無道の譏りは不義の富貴と、共に東に

流れ行かう、たゞそれ故に命が惜いぞ。

秀康「伊豆、無い命が惜しいわ。

伊豆「はあ、天運天命人の力は是れに盡きませう。

秀康「天ぢや運命ぢや、自然に開らく花を見て、天の威光に跪くより技巧に生ひし人間の、誇りを天に引き較べうぞ。

○牧師之家

藤原牧師居間之場

藤原牧師

武久富士雄

藤原牧師「虚偽の生活………虚偽の生活………皆嘘だ、皆偽りだ、他



の一切を疑つても今日まで天地の大愛を疑はなかつた疑ふを欲せ  
 なかつたが……ア、基督も欺かれた、私も欺かれた、汝等も  
 欺かれた、信一も欺かれた……欺むかれた、欺かれた、あの高  
 い塔……あの新しい會堂。悪魔……神の假面を被つた悪魔！  
 今日、唯今から、もう汝の支配は受けぬ、己は己だ……藤原覺  
 一の神は藤原覺一自身だ……悪魔！ オウ……會堂の黒い屋  
 根に女の顔が見へる……オウ女の顔が此方にも見へる、スフ井  
 ングス……！スフキングス。

○桐一葉

長良堤之場

片桐市正且元

片岡仁左衛門

木村長門守重成

市川高麗藏

市正「萬一にも其の期に至り、百計合期せずばそれまでなり當來を誰  
 かわ知らん、倒れて後止まんのみ、大丈夫、豈徒に杞憂すべき  
 や、後事を足下に詫せし上は、もはや思ひ残す事もなし。」

長門「シテそこもとはこれよりして。」

市正「居城茨木へ一まづ立越へ。」

長門「といはる、はうけ取りがたし、若しもやこれが今生の。」



市正「ア、イヤいさぎよき、最後をだに、遂ぐづき機會を失ひし、市正が命の拙さ御詫の名こそ立ため、償ひがたき身の大罪、此の身ひとつを兎や角と、千筋に迷ふ心のうち、イヤナニ心ばかりは此の後とても、君の御影につきそひまいらせ、萬一にと杞憂的中なし、大事去らなん其時には。」

長門「それがしとても事破れて、御運の未となる時は、此の世の思ひ出、奉公をさめ、關東勢が真中に縦横無盡の血戦なし、花々しく討死なさん。」

市正「オ、勇ましう、いさぎよし、それがし存へ世にあらば、其の目

さましき働さをば、餘所ながら見物なさん、尙再會は黄泉にて、

まづそれまでは長門どの。

長門「さようムらば市正どの。」

市正「随分堅固で。」

長門「そこもとにも。」

兩人「さらば〜。」

○寄 生 木

大木將軍邸之場

大木將軍  
篠原良平

佐藤 歳三  
伊井 蓉峰



將軍「馬鹿ッ!!!。貴人に先んじて席による。そんな禮法が何處にある? — 立ッとれ…………。汝の郷國は何處か…………うむ、陸中の東海岸か。すると、エ——ッ、海嘯のあつた處ぢやな、海嘯の損害は如何じや。蒙つたか、蒙らぬか。」

良平「はア。親戚内では流された家も死んだ者もござりやんすが、空族は皆害を蒙りません。」

將軍「職業は何か。」

良平「はい、農業でござります。」

將軍「兩親は揃つてるか。」

良平「はあ。」

將軍「何をしとるか。」

良平「…………。」

將軍「何處に居るか。」

良平「母は郷里に…………。」

將軍「じや父親は?。」

良平「彼處に。」

將軍「えッ。彼處は宮城監獄ぢやないか。監獄にか。」

良平「はい。」



將軍「うーん。すると父親は今監獄に居るのぢやな。

良平「はア。

將軍「如何して。

良平「私にはよう判りませんが、數年前郷里の村長を勤めて居りやう  
したが、公金費消の嫌疑で拘引になりました。盛岡裁判で宣告は  
うけやんしたが、阿爺は官廳の金を盗んだり使ひ込んだ覺はござ  
りませんちうので、控訴して仙臺監獄に居るでござります。

○オセロ

總督邸庭前之場

室 鷲 郎  
伊 屋 剛

川 上 音 次 郎  
高 田 實

伊屋「閣下、大層なお閉き様で御座りますな。が若し彼の事を御考へ  
でゐらつしやるなら、如何かお止めになさいませえ。

鷲郎「貴様は立去れツ。私に此の大苦痛を爲せ始めた奴は、彼方へ行  
けツ、妻が操を破らうと、知らずに居た方が幸ひぢやつたに。

伊屋「はて、如何遊ばしたですか、閣下。

鷲郎「人目を忍んで密會して居たのをそれと知らずに居た時には、何  
の不快も感んじなんだ………。輦音が逢引した其後で、私に向つて



話しをした其の舌の先は、勝芳雄にも程の好い事を云つた跡とは知らんちやつた、盗賊は這入られても、其這入られたのを知らずに居ればの何一ツ盗まれぬと同じ事に當るのぢや。

伊屋「其御述懐は御道理千萬で、何とも申し上げやうが御座いませぬ。驚郎「わが部下の軍隊残らずが、悉く妻と手を握らうとも、知らずに居れば何の事とないのぢやが。嗟。今は驚郎が一身の平和は寸断分裂。駒を陣頭に立て百萬の兵士を動かした身が、今では一婦人の爲めに動かされ、軍馬の嘶くも自分を嘲り、喇叭の聲の響くのも、私を罵るのかと思われも。」

伊屋「それ程までにお考で御座いますか。」

驚郎「伊屋剛、鞆音が不都合をして居ると云ふ確かな證據を見せて呉れんか。」

伊屋「それは閣下、如何も其儀ばかりは。」

驚郎「出来んかいや出来んとは云わせんぞ。」

伊屋「閣下……それは如何も恐れ入ります。」

驚郎「貴様は……根底なくして妻を讒謗したのであるまい。」

○日蓮辻説法

鎌倉小町大路之場



日 蓮 聖 人  
進 士 太 郎 善 春

市 川 八 百 藏  
市 村 羽 左 衛 門

善春「やあ、忝かたじけなくも三品中務さんほんなかつかさきやうのしんわう郷親玉のおはします、大倉の御所に  
程近ほどちかき、此小町大路このこまちのおほぢにてよし何事なにことのあらうとも、喧嘩けんわ三味尾籠まいびろうち  
やぞ、いやなに、御僧ごそう、某それがしは北條殿ほうじょうどのの家いへの者もの、進士しんしのたろう太郎と申まをすも  
のでおりやる、先さきの程ほどより見てあれば、鎌倉山かまくらやまの風靜かぜしづかに、由比ゆひヶ  
濱邊はまべの浪騒なみさわがぬ、太平たいへいの世よを教をしへなき濁世じよくせと罵ののしり、刺あまつさへ、諸宗しよしうの立りつ  
義ぎを誹謗ひぼうして、市人等しじんらの怒いかりを激げきし、忍辱にんによくの衣ころもを石瓦せきわに、何なにとて撲う  
たもらるゝぞ。

日 蓮 即 ち 眞 如

善 春 「そ の 妙 法 と は 。

日蓮「おお、その不審ふしんちつと尤なもなれど、昔むかし不輕菩薩ふきやうぼさつは、上慢じやうまんの比丘等ひくぐらの杖つゑ  
にあたりて、一乘じやうやうの行ぎやうとし給たまふ。法はふを説とき教をしへを布しくに、杖木瓦石じやうはくぐわせき  
をいとはうや。

善 春 「さ ら ば 御 身 の 法 と す る は 。

日蓮「わが法はふこそは大覺世尊だいかくぜそんが、靈山八年りやうざんねんに説とかせ給たまひし、正直捨權しやうぢきしやこん  
の實乘じつじやうなれ、此妙法蓮華經このめうはふれんげきやうに比くらぶれば、爾前にじん四十餘年よねんの權宗こんしうは、  
慈父じふの穉子おさなこに與あたへたる竹馬草雞ちくばさうけいに殊ことならず。



善眷「眞如は。」

日蓮「やがて衆生當體。我性の眞如はありながら、煩惱の闇に迷ひ、佛性の蓮を持ちながら、無明の酒に酔ひ癡れたる、衆生の身こそ悲しけれ。」

善眷「さて其妙法蓮華の功德は。」

日蓮「それ世間の蓮華は、夏開けども冬開かず、淤泥に生じて陸地に生せず、風にとまれ波に沈み、泳に閉ぢられ炎に萎む。わが妙法の蓮華は然らず、三世不變の花なれば、春夏秋冬ときはなり、遍一切處の蓮なれば、六趣三有に偏く咲けり、善惡一如の蓮なれば。」

悪業の厚薄を撰まず、邪正不二の花なれば、煩惱の淤泥にも生じ十惡の風にも壞られず、五逆の波にも沈まず、紅蓮の水にて閉ぢられず、焦熱の炎にも萎むことなし、一たび妙法蓮華經と唱ふる時は、一切の佛、一切の法、一切の菩薩、一切の聲聞、一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天神地神、乃至地獄餓鬼畜生修羅、一切佛性を、只一言に喚び顯す、譬へば籠のうちの鳥啼けば、空飛ぶ鳥の來り集り、空飛ぶ鳥の集れば、籠の鳥の出でんと欲するが如し、我身の佛性顯るれば、梵天帝釋の佛性、來りて加護し給はんこと、何の疑ひ候ふべき。



善書「さらばその妙法のみ正眞の教にして、今行はるゝ宗門は邪教なりとの證がおりやるか。

日蓮「いかでか證のおりやるまい。和殿はそれを聞かうとや。

善書「なかなか。御身の天魔と褊し給ふ、禪門の二祖すらも、膝を埋ひる雲のうちに、立ちて教を聞きつとかや。御身の證とせらるゝは。

日蓮「和殿も先より聞かれし如く、我説法は折伏を旨とし、邪を破り正を顯すに、忌み憚るところなければど、國家の盛衰、政道の善惡は、むざと言ふべきではおられない、わが見るところを申さうぞな

ら、相州人となり聰明におはし、累世の積威大いにして、四方に靡かぬ草木なく、世は泰平と見ゆれども、貴賤の風俗日々に亂れ上下歸依する宗門は、かたばかりなるものとなつて、三寶の跡斷滅せり。さあるに依つて此年頃、天災地妖荐りに起り、倭國の萌夙に現はるされど、爰に將來の一大難あり、かの藥師經に説かせ給ふ、他國侵逼難とは是ぢや。國民早く迷を醒まして、防ぎ遇めん覺悟せずば、わが大八洲の山川國土も、胡馬の蹄に掛けられんこは折を得て柳營に、勘文もて申さうと、兼て存ずる所なれど、和殿に愛で、告げ申すぢや。



○ハムレット

城内の一室

ハムレット

土肥 春曙

ハム「存ふるか……存へぬか……それが疑問ぢや、残忍は運命の  
 矢玉を、只管堪へ忍んでをるが大丈夫の志か、或は海なす艱難  
 を逆へ撃つて、戦うて根を絶つが大丈夫か？ 死はぬむり……  
 に過ぎぬ、眠つて心の痛みを去り、此の肉に附纏て居る千百の苦  
 が除かるゝものなれば……それこそ上もなう願はしい大終焉ぢ  
 やが……死は……ぬむり……眠る！ あゝ、おそろくは夢

を見う？……そこに障魔があるわ。此形骸の煩累を悉く脱し  
 た時に、其の醒めぬ眠りの中に、ごのやうな夢を見るやら、それ  
 が心懸りぢや、憂さ世の苦厄を自分と長びかすと、畢竟は此故じ  
 や。短劍の只一突で、易々と此世が去らるゝものを、誰がおめお  
 め〜と忍んでをらうぞ？ 世の凌虐や侮辱を……虐主の非道  
 や驕る奴輩の横柄や、成就是ぬ戀の切なさ、長びく裁判のもどか  
 しさ官吏の尊大面、勘忍すればよい事にして君子大人をも虐た  
 る小人共が無禮ななどを……死後の危惧でもなくば……誰が  
 此厭な世に、汗を流し呻吟きながら、此様な重荷を忍んでをらう



ぞ？曾て一人の旅人すらも歸つて來ぬ國が心元ないによつて、知らぬ火宅に往くよりはと現在の苦を忍ぶのがな……まづ此様に、良心は人を臆病者にならする、まつた決心の本の色は蒼白い憂慮に白ちやけ、如何な大事の企圖も、このゆるぎに逸れ、果は實行の名を失ふ……や、まて暫し！オフイリヤぢやな……なる姫神、予が罪の消滅をも祈り添へてたもれい。

○天目山

田野の郷之場

武田四郎勝頼  
農夫伍作

尾上菊五郎  
尾上松助

伍作「ハイ、御屋形様、いつも御變りのない御姿を拜みまして、伍作め、おめでたう存じ上げまする。

勝頼「ハ、めでたいか。弓矢神にも見放され、武運つきたる勝頼を、祝ふてくるゝは其方ばかりぢや、シテ何と心得てこれへ参つたぞ伍作「恐れながら御屋形様の御安否、どうあらうかと御案じ申しまして。

勝頼「すりや勝頼の安否心にかゝりて、その先途を見届に参いたつとか。

伍作「ハイ。



「頼ム、土民に似合わぬ健氣な奴のう。就ては彼の甲斐驪ぢや、彼れも其方に好ふ似て健氣に働さしが、過ぎし鳥居峠の退口の合戦に嘯し」

伍作「ハイ、其の甲斐驪が如何致しましたな。」

勝頼「其砌り、われは多勢に取圍められ、はや討死と思ひ切つたるが馬は駿足、追従る敵を蹴散して、亂軍の中を無事に麓まで引揚げたり。但し彼れは惣身に糞毛と矢を負ふて、殊に諸脚籠深に射させたれば曳けと叩けと足掻きは叶はず、不憫ながら乗捨てしぞ。伍作「すりや甲斐驪は畜生ながらも御恩を辨へ、大事の御役に相立ち

ましたか。伍作め却て嬉しう存じまする。

○ロメオ、エンド ジュリエット

香取家墓地之場

飛鳥公爵の甥春雄  
元田伯爵嗣子彥雄

井上 正夫  
伊井 蓉 峯

春雄「コラ、君は何をする、君が泰三を殺した爲めに百合枝さんは喜んで死んで了はれたのだ、君はまだ其上にもそんな事をするのか。死體に向つて何を仕様と云ふのだ。君は人を殺しただけでは飽き足らんのか。サア僕と一緒に來給へ。」



衆雄「マア君。打捨つて置いてくれ給へ。僕怒ると又罪を重ねなければならんから、どうか彼方へ行つて呉れ給へ。」

春雄「イヤ行かん、僕と一緒に來給へ。」

衆雄「どうしても君は向ふへ行かんか。」

春雄「イヤどうしても行かん。」

衆雄「ナニ。」

春雄「ヤ、やられた。」

衆雄「ヤア、コリヤ春雄さんだな、ア、さうか。道々多藏が何でも春雄さんが、百合枝さんと婚禮すると云ふ様だが、果して云つたの

か知ら、已が只さう思つたばかりか。ア、可哀相に、君も又不幸な人だ。サアこの墓の傍へ入れてやらう。ア、百合枝さん、オ、春三さんの墓もこゝにあるナ。僕は今君を殺した其の手で僕を殺すのだから、どうかそれで勘辨して呉れ、百合枝さん、私も貴嬢をこんな暗い處に一人は置きませんよ私は今貴嬢の墓へ下りてもう決して離れませんよ。百合枝さん。」

○敵國降伏

敵國降伏之場

對州の漁夫彌藤次

先代市川左團次

同 娘花野

市川米藏



宗の臣小太郎義春

市川左團次

彌「いやもおそろしい風雨ではあるまいか、眞夜中頃からたつぷり  
二時、吹いたとも降つたとも三千世界は阿鼻叫喊のこらず、碎け  
てしまふたかと思つた程。

花「立木も家もこな微塵どこもこゝも沼の様、雷は鳴る、雹は降る  
あの光物の恐ろしさ、雨が炎と燃へ立つて。

小「逆捲く波は大地に山、空も見るく地に落ちて、人畜忽ち奈落  
の底、地獄はこの世に下りしが。

彌「荒る丈けあれて見れば風神もくたびれてか忘れた様なこの天氣

花「したか昨夜の風雨だけは、たゞの嵐ぢやなさそうな。

小「誠に稀有の天變地異。

彌「あの風なれば女房の死骸も吃度此濱へ、吹きよせられたに相違  
はない。

花「ほんに昨夕の危急の場合、今一足小太郎様が早ふ来て下さつた  
ら。

小「如何にも母御をあの様に、ひざく入水はさせまじきに、口惜  
い事をいたしました

彌「併しその場で早速に、女房のかたきを取つて下され、わしは胸



がすきました、とは云ふものゝ、其時から、俄かに菩提心がおこりだし、敵味方の人たちを、吊ひたいと俄發心、頭まるめて藤阿彌陀佛。

花「母さんもおまへの手で、御經をあげて貰ふたら、さを浮ばれる事だろう。」

小「げに一身の發起は九族の上天、即往安樂、頓悟菩提、三有の夢も醒め果て、五障の雲も晴れ去らん。」

彌「こりや聲どのゝ方がよつばを黒人、わしの宗旨は一向念佛、たいなむ阿彌陀、南無阿彌陀佛。」

小「ともかくも向ふの濱邊へ。」

彌「お、女房……ではない佛の死骸、見つけたいものだのう。」

彌「はてな、あれほど有つた蒙古の兵船……おれが目は涙で曇るか、一艘も見えぬぞよ。」

花「もう朝靄とても深くはなし、昨夕までかゝつて居たあの兵船。」

小「見へざる筈はあらざるに、いづれへか風波を避けしか。」

彌「いや、あの風向では、これより外へは出られぬ筈若しや難破を……や、や……や、や……や、や、や、や、や、や、や、や、娘。」

花「何ぞ用でも」



彌「え、用どころかた、大變だ、大變だ、  
小「な、なにが大事。」

彌「あれ、見え、あれが見へぬかえ、蒙古の船が。」

花「何として。」

彌「若いくせにあれが見へぬかえ、蒙古の船が、あれ、あの様に

小「えつ。」

彌「沈んで居る、こわれて居る。」

花「どれ、どれ、何處に。」

彌「あの島かげ、この濱邊。」

小「あの黒いのが敵方の……。」

彌「お、毀れた兵船幾千艘、汚ない様に浮いつ、沈みつ。」

花「そんなら昨夕の大風雨で。」

小「一艘のこらす難船なせしか。」

彌「夢の様な變りかた。これも神々の加護であらう、あゝ日本は神

國だなあ。」

○不如歸

返子不動堂之場

浪子 氏男

喜多村 喜多村 秋月 桂太郎



浪子「良人！」

武男「何？」

浪子「癒りませうか。」

武男「エ？」

浪子「わたくしの病氣。」

武男「何を云ふのかい。癒らずに如何する。癒るよ、屹度癒るよ、乃公が癒さずにはをかん！」

浪子「でも萬一としたら癒らずに了まひはせんかと。そう時々思ひますの。實母も此の病氣でなくなりました。——。」

武男「浪さんなせ今日に限つてそんな事云ふのかい。必定なほる、癒ると醫者も云ふぢやないか。ねエ浪さん、そうぢやないか。其らア阿母さんは其病氣で——か知らんが、浪さんはまだ二十歳にもならんぢやないか。加之初期だから、如何な事があつてもなほるよ。御覽なそれ内の親族の大河原、ね、あれは右肺がなくなつて醫者が匙を抛げてから、まだ十五年も生きてるぢやないか。是非なほると云ふ精神がありさへすりやア屹度なほる。癒らんと云ふのは浪さんが僕を愛せんからだ。愛するなら岐度癒る筈だ。癒らずに此れを如何するかい。」



浪子「癒りますわ、屹度癒りますわ、あゝあ、人間はなせ死ぬのでせう！ 生きたいわ！ 千年も万年も生きたいわ。死ぬなら二人で！ ねー、二人で。」

武男「浪さんが亡なれば、僕も生きちゃア居らん。」

浪子「本當？ 嬉しいわ、ねエ、二人で！ でも阿母様がいらつしやるし、お職分があるし其う思つてお出なすつても自由にならないでせう。その時には私だけ先に行つて待たなければならぬのですねエ——わたくしが死んだら時々思出して下さるの？ エ？ エ？ 良人！

武男「あゝもう斯様な話しは止らぢやないか。早く養生して、よくなつて、ねエ浪さん、二人で長生きして、金婚式をしようぢやないか。」

浪子「死んでも、わたしはあなたの妻ですわ！ 誰がどうしたつて、病氣したつて、死んだつて、未來の來未の後までわたしは良人の妻ですわ！

○豫備兵

相良俊郎

相良家の焼迹の場

伊井 蓉峯

後郎「隨に自分で縫つたのに達ひ無い！ 咲ちゃん！ お前は能く、



死——死で下された！ お前に罪はない、元々お前は人間の罪惡  
 なぞと云ふか知らないのだから——お前は決して罪はないよ。けれ  
 ども、お前が靈の神聖を保たう爲めに、潔く肉を殺した其の健氣  
 さ！ 俺はお前に這麼偉大なものがあらうとは、實に知らなかつ  
 た！ いや、知らないと云へば、俺はお前の情が何れほどのものか  
 それも實は知つて居る積りで知らなかつたので、今こそお前の熱  
 い火の様な胸が、シミ／＼自分の胸に觸れる様に始めて感じたの  
 だ！ あゝ、然し、お前は最う此世には居ない——あゝ、唯一つ  
 の希望であり執着であつた相良家も阿父さんと一緒に灰となつて

了つた！ 俺には最う家もなければ親もない、希望も失ければ愛  
 も失つた、其の上俺には温い故郷もないのだ！ 俺は何の爲めに  
 生きるのか、生きて何所に身を置のか——あゝ、死だ！ 死なう！  
 お咲は俺の善智識だ………。むゝ十一月の今日は三日——天長節  
 だ………。あゝ、是れで自分の命を亡ぼせとて陛下は我々にお預  
 けなされたではない………。お、俊郎には未だ國家がある！

○霸王丸

磯の御所前松原の場

海女 磯 菜

尾上 梅 幸

舎人 磯の小二郎 時光

市村 羽左衛門



島長助左衛門

市川猿之助

小「小二郎様、まゐりました。」

小「礎菜か。」

磯「何の御用やら、皆に澤山騷られて。」

小「はて用事はない、退いていやれ。」

磯「そんなら私は、賺らかされたのかいな。」

小「と言ふでもなし、と云ふて。」

磯「佛にも又方便の一法あり。」

小「礎菜、そちや某と女夫になるか。」

磯「え、そりや御本心でか。おほ、、、、、嘘ぢやわいな。」

小「誓文武士に二言はない。」

磯「あれ、わたしや嘘とは言わせぬなれど、昨日迄あれ程嫌はれ、

………騷らしやんすのぢやないかいな。」

小「はて邪智深い、疑はしくば誓もしよう。」

磯「そんなら誠。」

小「誠とも、八幡血判もいたすであらう。」

磯「何の血判とるまでか、嘘にも嬉しい其お言葉。」

小「然らば今宵、初夜を合圖に忍び來よ。が一たん我妻と定まらば



はや、武夫の妻、固はせずとも。よも約束は破るまいな、いやさ。  
夫の申付け、嫌とは必ず肯むまいぞ。

「何ぢややら知らねども、私に出来ることなれば。」

小「和女にかぎる海の底。」

「え。」

小「初夜の合圖を忘れまいぞ。」

「あい………。何ぢややらそはくと無理かいな、私とて嬉しさ  
恥かしさは同じ、事とは言へ私は果報者、かる藻や潮路が聞きや  
つたなら、おほくく、私とした事が京にも名高い、美しい男を

持つに、何日迄海女の仲間かいな。潮染みた髪も洗ふて、紅も買  
ふて來ねばならぬわいな。

「とわいへ醜い生れつき、母様を怨むぢやなけれど、美うなりた  
いわいな、あゝ思ふまい思ふまい、醜いから嫌ひぢやと、小二郎  
様は仰しやりはせぬものを、皆私の取越苦勞、悲しい秋風がたゝ  
ぬ様に、此身で出来ることならば、爲ようとも、爲遂げやうとも  
どのやうな事でもするわいな。」



274  
892

大正五年五月十日印刷  
大正五年五月十五日發行

定價金十錢

不許  
複製

編輯者 東京市本所區元町六番地 高橋友太郎

印刷者 東京市神田區松住町五番地 菅井十一郎

印刷所 東京市神田區松住町五番地 碓文社

東京市日本橋區若松町四番地

發行所 湯淺春江堂



終

